

# 「深い学び」に繋がる中学校美術科の授業 ～造形要素と制作過程を軸にした授業改善と実践～

## 概要

図画工作科や美術科の授業は、「作品をつくり出すこと」が目標ではなく、活動を通じた様々な学びを目標としている。しかし、作品を制作させることを目標としているのではないかと推測される実践をしばしば見かける。筆者は、美術不要論など美術教育の危機的状况を招かないために、「学び」を軸とした中学校美術科の授業を実践し、実証を重ねてきたが、学びの「質」に着目し、質の高い学びを実現するための方策についてさらに研究を進める必要があると考えた。本研究は、継続してきた研究をベースにして、「深い学び」の実現に向けて、授業の「導入、制作、振り返り」の場面において指導の工夫を行ったものである。導入段階の工夫としては、生徒に造形要素を意識させるような活動を取り入れた。制作段階の工夫としては、生徒の探求活動を保障するために、試行錯誤の時間を十分保障し、活動しながら主題を模索できるようにした。また、「アイデアスケッチ」を

廃止し、実際の作品制作と同じ素材で様々なことを試すことができるように「試作品（習作）」を制作させた。振り返り段階での工夫としては、作品の主題と造形要素・技法との関係性を探るような相互鑑賞活動を取り入れた。その結果、生徒の多くが材料に触れて試行錯誤しながら表現を工夫することを楽しみ、主題と造形要素の関係を探りながら、自分なりの表現を探索していく姿に繋がった。また、表現と鑑賞の相互作用から、生徒の「造形的なものの方・考え方」が深まったと感じる場面も見られた。しかし、生徒自身が「深い学び」を実感し、造形的な視点をもつことの意味や価値に気付く段階までは到達していない。今後の課題として、造形的な視点自身を豊かにしていることを実感できるように実践や、身体感覚や行為を純粹に楽しむ中で、表現することの意味や価値を見つけ、自分なりの表現を楽しめるような授業づくりを研究する必要がある。



つみ よしあき  
堤 祥晃

勤務先：滋賀県高島市立安曇川中学校 教諭  
 出身校：滋賀大学教育学部

## 1. テーマ設定の理由

教育美術展など図画工作科や美術科で制作した作品を扱った展覧会で審査をしていると、素材の魅力や教師のアイデアで一見栄えは整っているが、子どもが考えたり工夫したりといった活動が十分保障されているのか疑問を感じる題材や、教師が手順や構図をマニュアル的に示して描かせたことが推測できる作品を少なからず見かける。たしかに、教師がお膳立てをし、素材や技法を指定して取り組ませれば、それなりに完成度の高い作品をつくり出すことができる。しかし図画工作科や美術科の授業は、「作品をつくり出すこと」が目標ではなく、活動を通した様々な学びを目標としている点を考えると、子どもが自ら考えたり、表現を工夫したりといった活動が十分保障されなければ、必要な資質・能力を養うことはできない。また、研修会等で現場の教員と交流する中で、「図画工作科や美術科の授業」作品をつくらせる時間」と捉えているのではないかと感じる教員も多く、展覧会に数多く入選・入賞させることが優れた実践であるという思い込みがこの傾向に拍車をかけている。このような作品主義的な考えの授業では、生徒が美術の学びを「単なる技能の習得」と捉えてしまい、「自分には美術は必要ない」「才能のある人のための特殊な教科」という見方をされてしまうケースも多く、美術不要論など美術教育の危機的状況を招く一因となっている。

そこで、著者の近年の実践研究では、中学校美術科の授業を「作品制作の場」ではな

く「学びの場」と捉え、造形行為そのものを楽しむ、材料に触れて感触を確かめながら試行錯誤するなどの経験を基に、子どもたちが主体的に活動するプロセスを通じて「学び」が生まれる題材を設定し、実証を重ねてきた。しかし、学びの「質」については十分検証できておらず、質の高い学びを実現するための方策についてさらに研究を進める必要がある。

今回の研究は、継続してきた研究をベースにして、質の高い学びを「深い学び」と捉え、造形要素を軸として、授業の「導入、制作、振り返り」の場面において指導の工夫を行いながら、実践し考察したものである。

## 2. 研究内容

### (1) 本研究における「深い学び」の捉え方

「深い学び」については様々な定義がなされているが、田村学は、子どもたちが習得・活用・探求を視野に入れた各教科等固有の学習過程（プロセス）の中で、それまで身に付けていた知識や技能を十分に活用・発揮し、その結果、知識や技能が相互に関連付けられたり組み合わせられたりして、構造化したり身体化したりしていくことだと述べている。そして、それが適正な態度や能力となっているでもどこでも使いこなせるように動いている状態、つまり「駆動」しているような状態となるよう身に付いていくことが重要であると主張している<sup>1</sup>。美術科における具体的な「深い学び」の視点については、学習指導要領の総説に深い学びの鍵として示されて

いる「造形的な見方・考え方を働かせること」<sup>2</sup>や、学習指導要領の美術科の内容に示されている、「主題を基に構想していく中で、新たなイメージが膨らみ、最初の主題とは違った主題が生まれることもある。そして、そこから再び構想が練り直されるなど、試行錯誤の中で主題とそれを基にした構想が深まっていくことも考えられる」<sup>3</sup>という記述に筆者は注目した。また、新井哲夫は心象表現の創作過程を、はじめに大まかな表現のイメージ（萌芽的表現主題）が生まれ、それを手がかりに表現主題の追求（試行錯誤、制作過程を通しての模索）が行われ、やがて作品完成に至ると述べている<sup>4</sup>。

これらのことをふまえて、造形的な要素や技法と、表現したい内容の関係性を探りながら制作を進め、試行錯誤しながら自分なりの表現を獲得する過程、そして、それらを通して得た視点で分析的に作品を見る活動を通して「深い学び」が実現できるのではないかと考えた。また、特に美術科では、思考・判断と表現の間を何度も行き戻りすることで学びが生じると考えられるため、実際に材料等を操作しながら考える時間を十分保障するなど、試行錯誤の幅を広げることで、より学びが深まるのではないかと考えた。

### (2) 研究の概要

前項の考えを踏まえ、本研究では、昨年度まで取り組んできた三つの題材に、導入、制作、振り返りの段階でそれぞれ次のような工夫を加え、それらを相互に関連させることも意識しながら授業実践を行った。

### ① 導入段階での工夫【造形要素の意識化】

・造形要素に意識を向けさせ、実感を伴って体験的に学ぶことができるように、表現内容と造形要素・技法との関係性を探るような活動を取り入れる。

### ② 制作段階での工夫【探求の保障】

・試行錯誤や探求を十分保障するために、授業の初期段階では主題生成を「仮のテーマ」に留め、活動しながら主題を模索できるように授業を展開する。

・「アイデアスケッチ」を廃止し、実際の作品制作と同じ素材で様々なことを試すことができるように「試作品（習作）」を制作させる。

### ③ 振り返り段階での工夫

#### 【造形要素を視点とした鑑賞】

・作品の主題と造形要素・技法との関係性を探るような相互鑑賞活動を取り入れる。



写真1 実際に触れて木を「感じる」

### (3) 検証方法

検証方法に関して、以前は選択式のアンケートを数多く取り入れていたが、選択式のアンケートでは判断基準が個々の生徒に委ねられているため、生徒によって基準が大きく異なってしまう点、成長して意識が高くなるなど判断基準が厳しくなるなど基準が変化するため、単純に経年変化を比較できない点などから、題材を通しての生徒の成長を比較・検証するには不適切と考えた。そこで、選択式のアンケートの活用は一部に留め、生徒の授業中の取り組みの様子、ワークシートの記述内容、作品の作者コメント等を丁寧に読み取るという手法で「学びの深まり」を検証することにした。



写真2、3 実際の樹木で色を確かめる

## 3. 実践事例

### (1) 実践事例1「私の木」(1年生) 絵画

#### ① 授業の概要

『私の木』は、校庭から自分のお気に入りを見つけて、選んだ木の一部分を拡大してポスターカラーで描くという題材で、美術が得意な生徒も得意でない生徒も、制作する中で「表現する喜び」を感じることをねらいとして取り組み始めたものである。この題材では、樹木に触れて観察する時間を十分にとり(写真1)、五感を使って「体感」することを大切にしており、自分が感じたことや考えたことをもとに描画することで、単なる見たものの「再現」ではなく、「表現」に自然と意識が向くように工夫している。また、鉛筆で細かい下描きをせずに描くため、多くの生徒が抱えている「絵の具で着色する」鉛筆で下描きした線の内側を塗る」という概念から脱却し、タッチを生かしながら「筆で触覚的に描く」という身体感覚を駆使しながら制作する活動に繋がり、絵の具の表現力や描画方法の多様性を体感しながら制作することができている。今回の実践では、前項の三つの趣旨をより明確にした形で授業実践を行った。

#### ② 授業の様子

##### (導入) 【造形要素の意識化】

導入で点描、ぼかし、にじみ、ドライブラシの四つの技法を試す。塗り絵に取り組みせ、それぞれの技法の特徴と、そこから受ける印象の違いについて4人グループで話し合させた。生徒は、絵の具による表現の多様性



写真4 パレットに試行錯誤の跡がある



写真5 塗るのではなく、筆で描く感覚で

を感じながら、表現意図に合わせて技法を選択するという視点が明確になった様子であった。そのうち技法にとられずに自分なりの筆使いを模索する生徒も現れ、体験的に絵の具の技法の多様性を探っている様子であった。

2時間目の授業で樹木の観察、3時間目の授業でスケッチを行った後、親指大の画用紙を持って、木の「色」を「採集」に行くカラーハンティングを行った(写真2,3)。小学校では外に写生に行くという活動も少なくなっているため、生徒は外に行けるというだけでワクワクしていた。また、ゲーム感覚で楽しめるため、体験的に色について学んでいる様子であった。この活動を通して、木の幹は茶色、葉っぱは緑色という概念が崩れ、その後の制作活動で、混色を繰り返して色を追求する姿に繋がった(写真4)。

**【制作】 【探求の保障】**

昨年度までの実践では、作品が完成してから作品題名を決めさせていたのだが、今回は最初に「仮のテーマ」を設定してから制作に入った。また、少し小さめのケント紙を大量に準備し、まずは気軽に試作品(習作)を描かせた。鉛筆での下描きについては、最小限に留めるように促し、絵の具のタッチや技法で表現を工夫するようにアドバイスした(写真5)。制作が始まると、行き詰まって作業が止まっている生徒はほとんどおらず、何枚も試し描きを繰り返す姿も見られた。例年と比べると、「仮のテーマ」を設定したことと、技法やタッチに意識を向けさせたことで、ほんやりとはあるものの、表現意図と技法や色の関係性を探りながら制作する生徒が増えた。この点については、後に詳しく述べる。

**【振り返り】 【造形要素を視点とした鑑賞】**

クラス全員分の作品を並べて、一番力強いと感じる作品、一番個性的で面白いと感じる作品、一番美しいと感じる作品の三つの視点で作品を選ばせ、なぜその作品を選んだのか理由を書かせた。その際に、色や形、技法などなるべく造形要素に触れて説明するように促した。

鑑賞中には、選んだ理由について友達と意見を交わしている場面も見られるなど、視点を与えることで漠然と作品を見るのではなく、じっくりと作品を鑑賞することに繋がっていた。また、ワークシートの記述では、自分が作品から受けた印象と、造形要素の関係性について、何らかの形で言及して思考が深まっている様子がうかがえた。

**③ 考察**

制作後の振り返りで行ったアンケート※では、「思いどおりに制作を進めることができたか」という設問には、5段階でA評価が14名(18%)、B評価が28名(36%)、C評価が22名(28%)、D評価が9名(12%)、E評価が5名(6%)であったのに対し、「意欲的に楽しく制作できたか」という設問には、A評価が38名(49%)、B評価が26名(33%)、C評価が8名(10%)、D評価が2名(3%)、E評価が4名(5%)であった(有効回答数78名、%は小数点以下を四捨五入)。このアンケート結果を見ると、思い通りに制作できた生徒の比率はやや低いが、ほとんどの生徒は意欲的に楽しく制作に取り組んでいる。これから、生徒が試行錯誤をしながらも、それ

※ アンケートの回答は【A評価：そう思う B評価：ややそう思う C評価：どちらともいえない D評価：ややそう思わない E評価：そう思わない】の5段階。



写真6 自己評価がCの作品



写真7 生徒Aの完成作品

を「楽しい」と感じながら制作している様子が推測できる。また、筆者が十分学びが深まっていると評価した12名の生徒に着目すると、「思いどおりに制作を進めることができたか」という設問には、A評価が2名、B評価が8名、C評価が2名、DとE評価は0名であった。さらに、「満足のいく作品が完成したか」という設問に対しても、A評価をつけていたのは2名のみで、B評価が7名、C評価が3名、DとE評価は0名と自己評価は必ずしも高くない。これは、授業中に試行錯誤を繰り返しながら自分の表現を探っていた様子と重ね合わせて考えると、生徒自身の、もっと高

いレベルの表現を追求したいという気持ちを読み取れ、深い学びに繋がっていることが推測できる(写真6)。

以下は、生徒Aの作品(写真7)に対する4名分の相互鑑賞のコメントである。1名は力強いと感じる作品、3名は個性的で面白い作品の対象として選んでいる。

### 《生徒ワークシートより》

・色をたくさん重ねていて、日の当たっている所は黄色っぽく、当たっていない所は黒で面白く思いました。筆をかすれさせて大胆に描いていたのでよいと思えました。(生徒B)

・様々な色を使い、光と影の重なる部分がグラデーションになっていて、いい作品だと思いました。明るい部分は鮮やかな色がたくさん使っており、影の部分は一色で描いていて面白く思いました。(生徒C)

・私が面白いと感じた理由は、木のザラザラ感がとてもわかりやすく、色合いも、光が当たっている所と影になっている所をしっかりと使い分けていて、とてもきれいだからです。色合いでデコボコ間を表現しているすごいと思いました。(生徒D)

・私がAさんの作品を選んだのは、すごく元気で力強い木だったからです。木って何色？って聞かれたら「茶色」と言うけれど、Aさんの作品は色の使い方がすごく上手で、黄色などの明るめの色や、黒系の暗めの色を使っていて面白いなと感じました。自分には思いつかない発想をしているので

すごいと感じ、ぜひ真似してみたいと思いました。(生徒E)

4名の生徒はそれぞれ造形要素に触れて作品の良さを記述しているが、ここで個々の記述内容に注目すると、生徒Cは、木の明るい部分から暗い部分まで、なめらかなグラデーションで描くことにこだわっていた生徒である。また、生徒D(写真6の作者)は、木の表面の雰囲気表現するために、細かいタッチを重ねながら点描の様に描いていた生徒である。このことから、この2名の生徒は制作段階の自身の試行錯誤の体験と鑑賞の活動を結びつけていることが読み取れる。他の生徒のワークシートからも、表現意図と技法や色の関係性を探りながら制作する中で気付いた視点で鑑賞していると感じられる記述が多く見られた。このことから、試行錯誤を通して自分の表現を探り、さらに交流や鑑賞をする中で、造形的な見方・考え方が深まっている様子が伺える。

## 《2》実践事例2『あの日、あの時、あの気持ち』

### 《1年生》立体

#### ① 授業の概要

『あの日、あの時、あの気持ち』は今までの生活の中の一場面を感じた「気持ち」を、粘土を使って抽象的に表現する題材である。この題材の大きな特徴は、表現意図と造形要素の関係性をわかりやすく学ぶために、具象的な要素を可能な限り取り除き、色や形、素材、構成のみで表現させる点である。また、筆に

よる着色は技術の差が出やすいことと、制作の初期段階から色について意識させたいことから、原則的に色は粘土に練りこんで着色するように指示している。さらに制作の初期段階で素材と触れ合う時間を十分設定していることも大きな特徴である。今回はより明確に造形要素を意識させることと、試行錯誤の幅を広げることを重点に授業実践を行った。

## ② 授業の様子

### 〔導入〕「造形要素の意識化」

導入では、まず素材の特徴や道具の様々な使用方法を学ぶために、1時間目は題材の内容は伝えずに、「粘土でとことん遊ぶ」というテーマで素材と触れ合う時間とした。次に「感情を色や形で表してみよう」というテーマで、うれしい・ハッピー系、悲しい・落ち込み系、イライラ・怒り系、怖い・恐怖系の4種類の中から一つを選び、現実世界には存在しない「未知の物体X」を制作するという授業を行った(写真8)。今回の新たな試みと

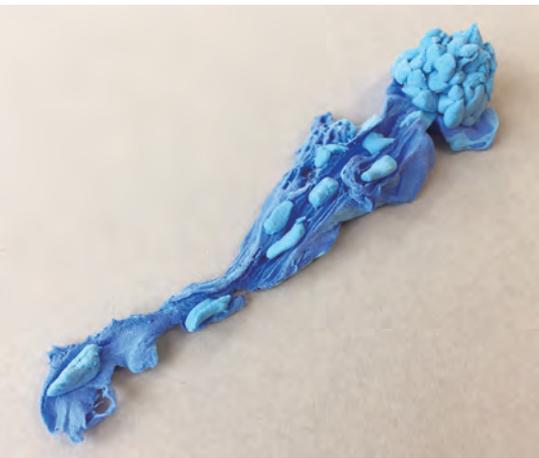


写真8 悲しい・落ち込み系の物体X

して、自分の選んだ感情は周りに内緒で制作し、最後にクイズ形式で4人グループのメンバーで当て合いをして、感想やアドバイスを交流するという取り組みを取り入れた。自分のイメージが上手く伝わらなかつた生徒の多くは、造形要素の中でも、特に色の選択の難しさを感じている様子であった。

### 〔制作〕「探求の保障」

生徒に、生活の一場面で感じた気持ちについて、具体物を一切使わずに色や形のみで表現するというテーマを提示した。そして、「仮のテーマ」を設定し、後は粘土を触りながら考え、後で変更しても構わないと伝えた。また、昨年よりも粘土の発注量を増やし、まずは試作品(習作)をつくらせるようにした。そして試作品で思いがけず良いものができた場合は、それを最終的に本番作品にしても構わないと伝えた。まずは試作品をつくるという活動が、生徒にある種の安心感をもたせることになり、粘土を触りながら存分に試行錯誤している様子が見られた。また、粘土に余裕があったため、二つ目、三つ目の作品を制作し、最終的にそこから提出作品を選ぶ生徒もいた。この題材でも、行き詰まって作業が止まっている生徒はほとんどおらず、ほぼ全員が授業時間内に作品を完成させることができた。

### 〔振り返り〕「造形要素を視点とした鑑賞」

クラス全員分の作品を並べて、一番イメージが伝わってくる作品、一番ユニークで面白い

い作品、一番内容に共感できる作品の三つの視点で作品を選ばせ、なぜその作品を選んだのか理由を書かせた。その際に『私の木』と同じように、色や形、技法など、なるべく造形要素に触れて説明するよう促した。自身が制作で体験し、感じたことをふまえて鑑賞しているためか、こちらの予想以上に鑑賞活動が盛り上がり、「これ伝わってくる」や「これ面白い！」など、生徒同士で交流しながら視点をもって鑑賞している様子が見られた。

### ③ 考察

この題材で一番着目したのは、立体作品の発想・構想である。一般的に、中学校現場では立体作品であってもワークシートやスケッチブックにアイデアスケッチを描かせることが多い。しかし、巻きつけたり、からませたりするような構成は、スケッチを描くことや頭の中でイメージすることが難しい生徒も多い(40ページ・写真9)。また、素材感や色や形の組み合わせなどは、実際に粘土を操作して確かめないとわからない場合がほとんどである。本題材での試作品(習作)は、粘土によるアイデアスケッチと捉えることもできる。素材を操作しながらアイデアを練るという行為は、造形要素と表現内容の関係性を探るうえで大変重要な活動であり、特に立体的な構成の発想には不可欠である。このことは、生徒の制作の様子から読み取ることができている。生徒Fは、当初は粘土をひも状に伸ばして遊んでいたが、それを何本もつくっているうちに、紐状の粘土が重なったり、絡まった



写真9 実際に操作しながら確かめる



写真11 ひらめきを形にしてい



写真10 行為から発想する様子



写真12 生徒Fの完成作品

りすると面白いということに気づき、色を変えて何個もつくりだした(写真10)。また、生徒Gは、最初は粘土を適当に混ぜていただけだったが、それが「怒り」のイメージに合うと気づき、今度は赤に着色した粘土で作品を制作し始めた(写真11)。

このように、行為↓発想↓行為↓発想の試行錯誤を経て構想が深まっていくのである。生徒Fは、別室登校から、様々な人の支えがあつて教室に復帰した生徒である。完成作品のコメントに「色は全体的に優しい色にしました。器のようなものを自分の脳と考え、色々な暖かい色と色々な形で飾って、優



写真13 イライラ・怒り系

しく暖かい気持ちがあふれているようにしました。頂上に集まったものは、自分もたくさんの人に優しさを返したい気持ちでつくりました」と書いている。ここから、自身の経験と造形要素の関係性を探りながら制作していた様子を読み取れる(写真12)。

### ③実践事例3『人生の花』(2年生) 絵画

#### ① 授業の概要

『人生の花』は、自分の人生を花に例えて半抽象的に描くというもので、様々な道具を使って多様な表現の可能性を追求しながら思い思いの花(人生)を表現するという題材である。花は大きく三つの部分で構成され、根は過去の自分、茎や葉は現在の自分、花は未来の自分を表す。本題材の大きな特徴は、絵の具の表現の多様性と楽しさを十分体験させ



写真14 うれしい・ハッピー系

るために、様々な道具や技法を生徒が自由に選択できる点と、アイデアスケッチではなく絵の具を使った試作品(習作)を描きながらアイデアを練る点である。また、半抽象的な表現では、技法や表現の面白さが強調されるため、描画技術の優劣にあまりとらわれずに互いの作品の良さを認め合うことができる。

#### ② 授業の様子

##### ① 導入 【造形要素の意識化】

導入では、『あの日、あの時、あの気持ち』と同様に、まず素材の特徴や道具の様々な使用方法を学ぶために、1時間目は「絵の具の可能性を探る」というテーマを与え、題材の内容は伝えずに、刷毛やローラー、スポンジ、歯ブラシ、ストロー、綿棒、タワシなど様々な道具を準備して色々な技法を試す時間



写真 15 今までにない新しい表現に挑戦

を設定した。一般的に、モダンテクニックの演習として似たような取り組みが行われているが、本題材では、教師の実演や技法の説明は一切無くし、全てを生徒の試行錯誤に委ねている。また導入の2時間目も『あの日、あの時、あの気持ち』と同様に、感情を色や形で表すというテーマを与え、あとは自由に表現させた。感情は同じくうれしい・ハッピー系、悲しい・落ち込み系、イライラ・怒り系、怖い・恐怖系の4種類を設定し、それぞれに合った色や形、技法を考えさせた(写真13、14)。

本題材でも、造形要素と表現内容の関係性に意識を向けるために、自分の選んだ感情は周りに内緒で制作し、最後にクイズ形式で4人グループのメンバーで当て合いをして、感想やアドバイスを交流するという取り組みを取り入れた。同じ感情を選んでいても、人により様々な表現があり、生徒は表現の多様性やそれぞれの個性を楽しんで交流している様子であった。

制作に入る前に生徒全員にSMAPの「世界で一つだけの花」を聞かせた。そして、上手下手ではなく、自分らしい表現を追求するために試行錯誤してほしいと伝えてから活動に入った。そして、本題材でも「仮のテーマ」を設定し、制作しながら考えていって後で変更しても構わないと伝えた。また、これまでは試作品(習作)の制作は必須ではなかったのだが、試行錯誤の幅を広げるために、授業の中に「習作を制作する時間」を設定し、全員に取り組みせるようにした。習作用のケント紙も十分準備して、納得いくまで繰り返し描くように促し、制作時間も昨年度より1時間増やして時間的な面でも試行錯誤を保障した(写真15)。

【制作】【探求の保障】

【振り返り】【造形要素を視点とした鑑賞】



写真 19 習作④

写真 18 習作③

写真 17 習作②

写真 16 習作①

写真 20 生徒 I の完成作品

生徒 I の作品

生徒が、自分が作品から受ける印象と造形要素の関係性について言及できていた。

### ③ 考察

この題材では、特に、試作品（習作）を制作することによって学びが深まる様子を目にすることが多かったので、習作を読み解きながら学びの深まりを考察することにする。

生徒Ⅰは美術がさほど得意な生徒ではない。しかし、やや不器用ながらも、真面目に粘り強く取り組める生徒である。最初に決めた仮のテーマは、根（過去の自分）は「辛いことがあっても、家族に心配をかけないように明るくふるまっていた自分」、茎（現在の自分）は「色々な事に迷いながら進んでいる自分」、花（未来の自分）は「沢山のことに挑戦したい自分」である。

最初の習作①（41ページ・写真16）では、辛い気持ちを暗い色を使ったドライブラシで表現し、明るくふるまう自分を、オレンジの唐草模様で表現している。そして迷う自分を曲がりくねった茎、沢山のことに挑戦したい気持ちには広がっていく多くの線で表現している。

習作②（41ページ・写真17）では、茎に暗い色を入れることで迷う感じが増すことを発見し、オレンジよりも黄色の方が明るい感じになると気づいた。また、ここで多くの人に支えられているというサブテーマが加わり、背景に色とりどりの点々が描かれた。

習作③（41ページ・写真18）では、茎の曲がり方を、ぐるっと一周させる方が面白いと感じた様子で、花も色を重ねることで深みが出る

ことを発見した。

習作④（41ページ・写真19）からは、構図やタッチにこだわって追求している様子が読み取れる。そして、完成作品（41ページ・写真20）では、構図のバランスが整い、背景は点々ではなくスパッタリングで描かれている。また、未来の自分には、上に向かって伸びていきたいという要素が加わった。このように習作と制作の様子から、造形要素と表現内容の関係性を探りながら自分の表現を追求する中で、主題そのものも深まっていく様子が読み取れる。

## 4. 研究の成果と課題

本研究では「①造形要素の意識化、②探求の保障、③造形要素を視点とした鑑賞」の視点から授業実践を行い、深い学びを推進する美術教育の研究を進めてきた。その結果、まず三つの実践題材に共通したこととして、生徒の多くが材料に触れて試行錯誤しながら表現を工夫することを楽しんでおり、主題と造形要素の関係を探りながら、自分なりの表現を探究していく姿に繋がった。さらに、造形要素を視点として制作、鑑賞を行うことで、表現と鑑賞の相互作用が生まれ、生徒の「造形的なものの方・考え方」が深まったと感じる場面も見られた。それでも、生徒自身が「深い学び」を実感し、造形的な視点をもつことの意味や価値に気付く段階までは、まだ到達してはいない。また、絵を描くことに苦手を意識を強くもっていたり、自分に自信がなく、自分を表現することへの抵抗感をもって

いたりするために、表現することを存分に楽しめない生徒も一定数見られる。

今後の課題として、造形的な視点が自身を豊かにしていることを感じ取れるような実践や、身体感覚や行為を純粋に楽しむ中で、表現することの意味や価値を見つけ、技能の優劣にとらわれずに自分なりの表現を楽しめるような授業づくりを研究していく必要がある。

### 【引用】

- 1 田村学『深い学び』東洋館出版社、2018、pp.36～37
- 2 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編』日本文教出版、2018、p.4、p.10
- 3 前掲、p.35
- 4 新井哲夫『思春期の美術教育』日本文教出版、2010、p.79

### 【参考文献】

大橋功、新関伸也、松岡宏明、藤本陽三、佐藤賢司、鈴木光男、清田哲男『美術教育概論（新訂版）』日本文教出版、2018

付記：本稿に関連した内容は、「滋賀大学教育実践研究論集2号（2020.3）」及び「滋賀大学教育学部附属教育実践センター紀要第26巻（2018.9）」に掲載しています。

